

保存活用計画書

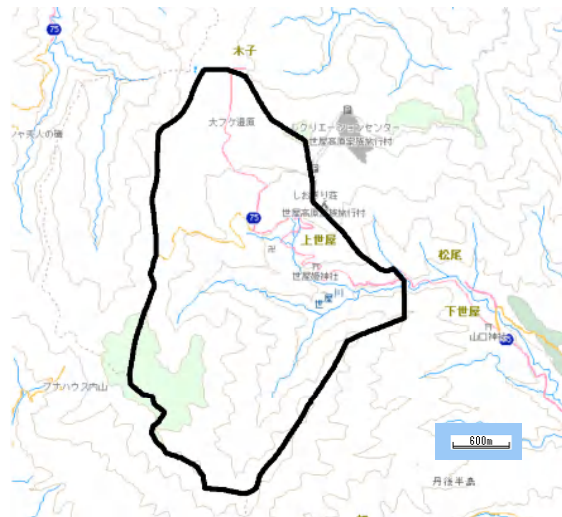
景観資産の名称	棚田と笹葺き民家が織りなす上世屋の里山景観
申請者	NPO 法人 里山ネットワーク世屋

代表写真



1 位置及び範囲

【位置】



【登録範囲と範囲設定の考え方】

上世屋地区の集落範囲全体を登録範囲とする。

集落範囲内の山地が集落の中心地を取り囲んでおり、居住地から一体的な景観として捉えられること、また、上世屋集落の特徴ある景観と生活文化は、生活域に近い耕作地や里山林はもちろんのこと、居住地から離れたブナ林などにも支えられていたことから、全体を登録範囲とする。（約670ha）

2 自然、歴史、文化等からみた特性

□景観資産の魅力

京都府宮津市の上世屋地区は、山間に棚田が広がり、トタンをかぶっているとはいえ伝統的な造りの民家がまとまって残る美しい里である。集落上手の高台から見下ろせば、背景に日本海を臨むこともでき、海に囲まれた丹後半島における山間集落の持つ魅力がコンパクトに集約された場所と言える。さらに後述の通り、この地域でしか見られない極めて興味深い自然と文化の関係がセットで残されている。

こうした景観的な魅力と、それを次世代に引き継いでいこうとする取り組みが評価されて、平成 16 年には里地里山 30 選（読売新聞主催）に選定された。また、平成 19 年に新規指定された丹後天橋立大江山国定公園の中で、世屋高原地区の中心をなす里山景観として位置づけられたほか、平成 21 年には日本の里 100 選（朝日新聞社主催）にも選定されるなど、その魅力は内外から高く評価されている。

□自然的特性

集落の最奥部はブナ林となっており、天然林に近い様相の林分が残されているほか、集落で起きた災害からの復興の際に炭材を供給したブナの二次林や高齢のミズナラ二次林などがひろがる。こうした状態のよい二次林の中には、日本海側の植生要素の中に、太平洋側の植生要素も混じり、貴重な植物相を構成する。集落に近づくにつれ、薪炭などとしての利用頻度の高い二次林→刈り取り頻度の高い田畑周辺の二次林、と移り変わっていくが、そうした環境の中に、人為的な管理に適應してきた林床植物が多く存在する。このような様々な人為の加わり方の段階があることで、多様な生物の生息地となっている。また、自然湿地や湧水にも恵まれ、そうした場所に特有の貴重な動植物が生息する。

□歴史・文化的特性

世屋はかつて、天橋立を見下ろす視点として有名な成相山の奥の院として開かれた伝承を持つ集落であり、集落内の銚子の滝周辺の観音堂や大シデの碑などにその由緒が刻まれている。集落下手の世屋姫神社は棚田の中に島のように浮かぶ神社林を構成しており、上世屋を訪れる人がまず目にするランドマークとなっている。

上世屋の自然と文化の関係を特徴づける景観のひとつが、笹葺き屋根の民家である。山野に生えるチマキザサを葺き材とする民家は、日本海側周辺の中でもとくに丹後半島に独特のものであり、現在は諸事情によりトタンをかぶっている家が多いものの、近年葺き直された 1 棟があるほか、他の民家についても、伝統的な構成をよく残している。

野生のフジから繊維をとり、時間と手間をかけて織られる「藤織り」も上世屋に残る貴重な自然資源利用の文化である。

□周辺環境との関係

上世屋をとりまく旧世屋村の諸集落は上世屋と密接な関係にある。周辺集落の人々が上世屋の景観保全に協力する一方、上世屋の持つ景観的な魅力が、周辺地域にも人の流れや地域の価値にとって、よい波及効果をもたらしている。

3 景観の保存、育成及び創造に関する事項

□法律や条例などによる景観上の規制誘導事項

集落上流部のブナ林や大径木の残るミズナラ林は京都府自然環境保全地域に指定されている。

集落とその周辺部は、平成 19 年に丹後天橋立大江山国定公園の第 2 種特別地域に指定されている。

□景観づくりの目標像

現在の上世屋の景観的な魅力を形成している民家群、棚田を中心とする耕作地、周辺の里山林を、その構成を大きく崩すことなく一体的に維持していき、景観を活かした集落づくりを進めていくことを目標とする。また、そうした目に見える景観を作り出してきた、景観の目に見えない部分である日常の生活文化を将来の世代に継承できる形で残していくことも目標とする。この「景観」と「生活文化」の双方によって、固有の魅力を生み出し、集落とその周辺の居住者にとっても生活の糧となるような取り組みとしたい。

□景観づくりの取組

当該地域では、大きくふたつの団体が景観づくりに関わる活動を行っている。ひとつは申請団体でもある「NPO 法人里山ネットワーク世屋」であり、もうひとつはコンソーシアム団体である「笹葺きパートナーズ」である。いずれも、上世屋に魅力を感じている地域外の方々が、地域住民と連携をして取り組んでいる活動である。

「里山ネットワーク世屋」は、①世屋の里山文化伝承の場としての拠点の整備、②衣・食・住を通じた里山管理、③環境教育やレクリエーションの場としての里山利用、の三つを柱として事業を展開している。それぞれ異なる視点から上世屋の「資源」や「文化」を残し、活用する活動を行っていただくいくつかのグループが、お互いの活動情報を交換し、世屋の里山の継承を相互に連携して支援していくために、NPO 法人化した組織である。現在は主に事務所兼来訪者への情報提供拠点として民家 1 棟を借りて整備し、農業や生活文化体験のイベントの拠点としているほか、棚田耕作の支援や放棄田の復田支援を実施している。また、里山案内人講座を定期的に関催し、上世屋の景観資源を活かすためのガイド養成を行っている。

「笹葺きパートナーズ」は、地域内外のいくつもの組織や個人が関わりあいながら、コンソーシアム事業としてササ葺き屋根の復活という共通の目標を目指して活動している。その中心となっている「丹後村おこし開発チーム」は立命館大学の経営学部生のゼミ活動を核にできた団体であり、NPO 法人美しいふるさとを創る会や森林組合などが地元への受け入れや指導を行っている。宮津市所有の体験実習棟での笹葺き屋根の再生を続けながら、その再生後の利活用事業の検討や地域の草刈りなどへの応援も行っている。

[課題]

外部からの来訪者や周辺地域の居住者らによって上世屋の景観資源の維持管理が担われつつあるが、近年Uターン、Iターン者も見られるものの、同地区の元々の居住者は依然高齢化が進んでおり、とくに生活文化を継承する上での課題となっている。棚田や里山林を活かすために必要な、維持管理のための労働力確保も課題である。

[解決のためのアイデアや方針]

伝承すべき生活文化については、NPO のワークショップ活動や専従職員らによる聞き取りと記録を地道に進める。様々な体験イベントをもとに、そこから本格的な耕作の継続や集落周辺の景観管理に携わるような仕組みを作り出す。上世屋に関わる様々な団体と連携して景観維持管理を実施する体制を作る。

4 景観を活かしたまちづくりへの展開に関する事項

□景観を活かしたまちづくり活動

[現状]

3. で示したような、棚田での農業体験イベントや、里山林、河川などでの里山案内ツアー等を実施している。

[課題]

過疎化や高齢化が急速に進む中、これからの地域の担い手がほとんどいない、という厳しい状況下にある。地域住民も加わった市民組織が、里山景観を活用する中で、地域そのものを継続させる道筋を見いだせるかが、大きな課題となっている。

[景観を活かしたまちづくり活動のアイデアや方針]

棚田や里山林の活用は、地域文化の伝承になるだけでなく、多くの人の連携をもたらし、里山林の利用、そして地域で培われてきた知恵や技術の伝承と新たな活用につながっていくと考えられる。次世代を担う子どもや学生たちが、その土地本来の自然や、その土地で育まれた伝統産業や文化に接し、里地里山の今後について共に考える場としても位置づけられる。上世屋に魅力を感じている地域外の方々が、地域住民と連携をして取り組む現在のスタイルをさらに展開し、そこからより長期的・継続的な交流や、新規の定住者などを得ながら集落づくりを進めていくことを考えていきたい。

5 その他必要な事項

参考資料

- 1) 「宮津市史」 (通史編)
- 2) 「図説 京都府の歴史」 森谷 尅久 (河出書房新社)
- 3) 「探訪 丹後半島の旅」 澤 潔 (文理閣)
- 4) 「柿の民俗誌」 今井 敬潤 (近畿民族叢書)
- 5) 「緑の読本」 シリーズ79 (環境コミュニケーションズ)
- 6) 「上世屋 緑へのいざない」 宮津市
- 7) 「未来に向けて過去、現在の里山景観を読み解く」 深町加津枝 (「国立公園」)
- 8) 「環境デザイン学」 森本幸裕、白幡洋三郎 編 (朝倉書店)